

## 令和3年度第2回高知県地域学校協働活動推進委員会 会議要旨

1. 日時 令和4年2月4日（金）9：30～11：30
2. 場所 県庁西庁舎2階教育委員室
3. 出席者 委員9名、うちオンライン参加4名（1名欠席）、事務局5名 ほか
4. 議事 (1) 令和3年度実績報告及び令和4年度事業計画  
(2) 協議  
テーマ「自律へ向かう児童・生徒の育成のための方策～地域学校協働活動の取組を通して～」
5. 議事概要

委員長の議事進行により、以下の事項について、事務局から説明が行われた。委員からの主な意見等は次のとおり。

### (1) 令和3年度実績報告及び令和4年度事業計画について説明

#### ①コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）について

（委員）

コミュニティ・スクールのことについて、来年度100%を目指して取り組みを進めていくという点で、2点質問をさせていただく。1点目は、夏の研修の中身について、今の段階で何か検討しているものはあるか。また、教職員研修、集合研修、オンデマンド研修等は夏の研修と併せて別を実施する予定か。

2点目は、市町村教育委員会を訪問する際、市町村の担当者により理解をしていただくために、何かお考えがあるか。

（小中学校課）

1点目の研修については、現段階では8月2日を予定しており、教育センターのホームページにも予定ということでご案内している。8月上旬に予定することで、研修の内容を各学校の校内研等で生かしてもらえれば教職員の理解も進むのではないかと考えている。

併せて、オンラインでの配信も考えている。例えば、研修当日に校内研修をセッティングすることで、講師の講話を聞くことが可能になってくると考える。

また、研修内容については、各学校の取組の段階に応じた内容にできるよう、今後検討していきたい。

2点目の市町村訪問については、今年の市町村訪問の際、コミュニティ・スクールの設置を令和5年度までに100%目指しているということをご存じない市町村担当者もいた。理由としては、人事異動の関係で、引き継ぎ等が上手くいかず、コミュニティ・スクールの理解が十分でなかったことが問題点として上がってきた。したがって、来年度については、できるだけ早い段階で市町村担当者に対して周知を図りたいと考えている。4月当初は市町村担当者も多忙ということを知っており、集合での実施は難しいと考え、できるだけ多くの方に参加いただけるようオンラインによる説明会を開催する予定である。

併せて、来年度も引き続き、生涯学習課と共に9月以降に市町村訪問を実施し、その際に改めて詳しく説明する予定である。

(委員)

コミュニティ・スクールを100%にするという件について、パーセントが伸び悩む理由は、やはり先ほど話にあったように、浸透してないというのが現実だと思う。

教員の働き方改革、体験学習等、多様な教育活動をする中で、学校だけで実施するよりも、地域の人や多様な人と関わることによって、多様なことができるという意識やモチベーションが学校として高いかどうか1つ。

それともう1つは、教職員への研修内容について、例えば地域の人や保護者の利用、活用によってどの程度学習範囲の内容が深まるのか、そういう具体的なところが見える研修を実施することで、学校全体がコミュニティ・スクールを必要とし、更に運営協議会が豊かになると考える。

(委員長)

これは小中学校課へのご意見とする。

## ②高知県社会教育実践交流会について

(委員)

1月23日にあった高知県社会教育実践交流会に参加し、講師である豊重哲郎さんの講演が大変良く、非常に貴重なご意見をいただいた。私も非常に感銘を受けてモチベーションも上がったなという実感がある。是非、この話をもっと多くの人に聞いていただきたいかと思う。やはり、このご時世、会場に足を運ぶことを留まった方もおり、集合とオンラインを並行したハイブリッド型を是非考えていただきたいかった。

また、実践発表が文書発表になったが、やはり文書発表では、発表する方の思いはなかなか伝わらないと考える。例えば、実践発表を収録しておき、後日オンデマンド配信することにより参加者に自由に見ていただくこともできると思う。更に、質問等を受け付けるコーナーを作ることによって、交流もある程度可能ではないかと思う。

もちろん集合研修が望ましいが、集合研修ありきでは学びが止まってしまうと思う。学びを止めないためにも、ハイブリッド型を取り入れていただきたいことが、私からのお願いである。

(生涯学習課)

1月14日に県の感染症対応の目安におけるステージが警戒（オレンジ）になり、実行委員と協議した結果、やはりリスクが高いと判断し、急遽、文書ということになった。本来であれば、顔と顔を合わせる事が非常に貴重だということが、体験上、我々も分かっている。更に2月3日の朝日新聞では、東北大学の川島隆太教授が、オンラインではコミュニケーションが実は脳においてはとれていないということの研究発表されていた。実際は対面で実施したいと強く思っていたが、やむなく文書という形となった。

また、豊重哲郎さんの講演だけでもオンラインで実施できないかと苦慮したが、人的面、予算面で断念。今回は最初から人と対面することに重点をおくことを実行委員が決定しており、折り合いがつかずオンラインによる実施となった。来年は、人的面と予算面についてなるべく検討し、ハイブリッド型で実施できるよう検討していく。オンデマンド配信は、非常に有効な手立てであり、実践発表者と講演者にそれぞれ許可をもらい、実施できるよう検討していきたい。

### ③高知県地域ぐるみの学校安全体制整備推進事業について

(委員)

最近、私の住んでいる市でも休校になっている学校があり、休校になった学校の子どもが塾に行った際、「あなたの学校は休校だから入ってはいけない」と言われて、親が迎えにくるまで長時間、外で待っていたケースがあった。これは、県や自治体の教育委員会がどうこういっていいものでもないが、このことについて、学校や保護者を含めた知恵の出し合いが少し必要ではないかというふう感じた。私自身も知恵が思い浮かばず、問題提起だけさせていただきたい。

(学校安全対策課)

先ほど難しい問題提起があった。塾であった件なので、夕刻から夜にかけての時間帯と想定される。下校時、夕刻が最も不審者情報が多く、そのような心配もされる。塾への対応については、県教育委員会あるいは市町村教育委員会、学校の立場からは、情報提供に留まるかと今の時点では思う。しかし、放課後児童クラブや学校の教育活動の中で、今回のように長時間に渡って、子どもたちが危険な状態になっていないか注意しなければいけない。また、地域の目や学校教育活動の目から、地域ぐるみで子どもたちを見守り、子どもたちの安全を司っていく気運を上げることが、遠回りかもしれないが、解決につながるのではないと思う。学校教育活動の中でできる限りのことは実施していき、今いただいた情報については、機会を見つけて、事例の紹介や注意喚起等をしていこうと思う。

(委員)

このコロナの中で学校が休校になった際、一番困るのが保護者だと思う。だからこそ、地域学校協働本部や放課後子ども教室において、子どもを見守っていくことが安全対策につながるポイントだと思う。そこがすごく充実していることが、保護者のみなさんが心を豊かにして仕事にも従事でき、子どもと関わることによって子どもの生活習慣をきちんと身に付け、より良い方向に行くのではないかと感じている。

(委員長)

学校が休校になることで、子どもたちが放り出されているような状況があり、子どもを預かっている塾や習いごとをやっている事業者、企業にも安全対策に関しては、呼びかけや声かけをする必要があるのではなかろうか。なかなか行政から言えない部分もあると思うが、行政とボランティアだけで学校安全、子どもの安全のことに取り組むのではなく、事業者や企業にも少し呼びかけて地域社会全体で安全度を高めたいようなになれば、更によい。

(委員長)

15ページの資料4の重点取組の(1)にある学習支援員、協働活動支援員、協働活動サポーターといった方々は、いったいどこでどんな仕事や活動をされている方々か。

(生涯学習課)

役割によって名称が異なるが、いずれも地域学校協働本部事業や放課後子ども教室に関わっている有償のボランティアの方々である。

(2) 協議 テーマ「自律へ向かう児童・生徒の育成のための方策～地域学校協働活動の取組を通して～」

今後、自律へ向かう児童・生徒の育成のための方策として、「地域学校協働活動推進員のコーディネーター機能の強化を図るためのアイデア」、「共に育ち合うために必要な周囲の役割」について意見交換。

(委員)

私の学校はコーディネーター2名体制であり、1名は主任児童委員さんをされている方である。この方は、子どものことや家庭背景、環境をよく知っていて、児童委員や民生委員のネットワークもあり、情報が入ってくる。そういった民生委員のネットワークなどを上手く活用できるようなことがあると、いろいろ動きやすいと思う。また、特に個々の児童の情報を共有することについては、学校の理解が大事であると思う。学校はそういうことに踏み込みたがらないことがあったりもするが、それをやらないと本当に困っている家庭の支援はできない。そのためコミュニティ・スクールだと思う。だから、コミュニティ・スクールは、こういったことを解決するためにあるということを、学校側が認識しないと事が前に進まないのではないかと思うし、それをやっていくべきだと思っている。

(委員)

私も学校の理解がやはり大事だと思う。先ほどのコミュニティ・スクールがなかなか100パーセントに達成しないという話もあったが、とりあえず設置はしても、なかなかそれが機能的になってないところがあると思う。私自身学校運営協議会に参加させてもらっているが、学校運営協議会の位置付けや、学校運営協議会をどのように活用していけばいいかを検討していくことで今は精一杯であり、まだまだ機能的になっていないのが実状である。やはり、地域学校協働活動推進員（コーディネーター）を、学校の中でどう位置付けていくのかがとても大事であると思う。居てもらうだけでなく、学校の中でどのような役割を担ってもらうのか、どういう会に参加してもらうのかを考えていかないと、やはりコーディネーターが一人でそこにいて、何か考えて頑張るとい状況になってしまうと感じる。したがって、コーディネーターの学校の中でのコンセプトや位置付けをしっかりと行うことが、コーディネーターを支える1つになると思う。

(委員長)

学校には地域連携担当の先生がいる。多くの場合は教頭先生が担われていると思うが、そういった地域連携担当の先生とコーディネーターの方が二人三脚で上手く回せていないということか。

(委員)

もちろん地域連携担当の先生とチームになってやっているが、それが学校全体の取組につながっているというわけではなく、2人で何か頑張っていると感じるところがまだある。始めて数年で、馴染んでないところがあると思うが、学校の中でのコーディネーターの位置付けは、どのようになっているか。主任児童委員のような方にコーディネーターをしてもらうことは、困っている家庭への支援の近道になると思うが、そういった子どもたちを支えるための学校内での会に、コーディネーターが参加できているのか。学校の中心部までコーディネーターが関わっているのか疑問を感じる。

(委員)

やはり学校のことは学校の教職員が責任を持って、地域のことは地域に、ということで、学校と地域がなぜ連携協働しなくてはいけないのか、そこが一番ポイントになると思う。地域との連携協働が必要だと大事だというのがストンと落ちてくると、そこから自然と仕組み作りというのは発展していくと思う。それぞれ学校、地域によって仕組み作りはいろいろできると思う。

私が所属する学校も来年度学校運営協議会を校区でスタートさせ、協働本部も準備を今している。協働本部自体はあったが、コーディネート機能であったり、多様で継続的な活動という面からは、まだまだ不十分なので、それを今整理をしているところである。そこで話をしていくことは、今、どんな子どもを育てて、どんな取組をするのか、それが一番根幹になくてはならないと思っている。その後することは、やっぱり学校課題、その課題が何であって、その課題を解決するためには、もはや学校の力では無理であって地域の力がある。

また、私が所属する自治体においても、苦情の電話がたくさんかかってくる。それを教員が全部関わって対応すればとてもじゃないので、そこで地域の力を借りる、そういうような地域との連携協働の必要性を共有してそれを実現するためには、どうしていくのか、それが学校運営協議会での熟議の内容になってくと思う。学校のいわゆる課題であったり特色、それをしっかりとテーブルに乗せて、学校運営協議会や地域でも提示をしながら、これをどのように改善を図っていくかというのを進めていくと、どういう仕組みを作るかというふうなところに発展をしていくと思う。

あと1つは、やっぱりコーディネーターが取り組んでいること、これを後押しをするためには、やはり地域の方々が支援をしてくださっていることに対して、それをどういうふうに評価をしていくかがポイント。それができないとなかなか持続可能な制度にはなっていないと思う。公費保障の部分も1つの大きなボランティアであるとは思いますが、やはり地域の方々がしてくださっている支援に対してどう評価をしていくか、自己有用感を高めることも含めて、そのサイクルを仕組みの中に入れていく必要があると最近つくづく感じている。

(委員)

私も以前すごく問題が大きかった学校に関わったことがあるが、教育委員会にご相談すると「学校で起きたことは学校で始末するように」と言われた。同じ自治体なのに、教育行政と学校運営が真っ二つになっていることをすごく実感した。今、学校教育の中で、(がん教育など)〇〇教育というのが百以上できて、学校もそれをしなければいけない状態で、すごく抱え込んでいる。私は高知県看護協会に所属しているが、今子どもの生きる力を育むための性教育で、看護職の助産師、看護師、それから保健師がそれぞれの職能で、何か学校にお手伝いすることができないかと、研修会を開いたりすると本当にわずかだが、小学校の校長先生もご参加いただけました。研修に参加いただいた校長先生からは、外部の人材をどうやって活用したらいいか、どこを窓口にしたらいいか分からないという意見があった。文科省から下りてきた百以上ある〇〇教育をこなすのではなく、地域と共有しながら、地域の課題に合わせてできるように地域ごとの仕組みをつくることも必要だと思う。

平成30年度から学習指導要領が変わり、地域といっしょにやらなくてはいけなくなっているが、高知県では学校に行けない子どもたちも増えてきている。そうした子どもにも支援していくことが、学校だけではもう難しくなっている現状もある。コーディネーターに負荷をかけるのではなくて、第三者

的に見るアドバイザーも入れながら、その進捗状況に合わせてやる。チームが組織、協議できる場が発展していくような評価やアドバイスができ、伴走していけるような体制、アドバイザーも必要になってきているのではないかと思う。

(委員長)

連携・協働の必要性や課題を共有したり、実際にコーディネーターが何か困ったり、しんどくなったりした時に身近で一番相談しやすい相手は、誰になるか。

(委員)

私自身、いつもは放課後子ども教室や児童館の運営に関わっており、コーディネーターも地元の方で知っている方で、よく相談には来ていただいている。しかし、なかなかコーディネーター自身がどのように動けばいいか、そもそも私に与えられた役割ってどういうことか、まだまだ飲み込めていないところがある。

(委員)

課題の整理自体ができていなくて、それが共有できていない。だからベクトルが合わせられないということが起きていると思う。そのために、課題を整理していく人、第三者的に一緒に整理してくれる人がいたりすると、コーディネーターや学校も課題を落としこむことができ、前に進んでいくのかなと思う。

(委員)

コミュニティ・スクールでどのようなことをすればいいのか、というところが、まだまだ落ちておらず、みんな手探りで考えているところだと思う。結局、何か新しいことを始めようと思ったら、しんどいので、今既存のあるものを使って考え方をどう新しくしていくかというふうに考えていく必要がある。学校の教育活動を実施していく中で、学習方法に困ったときやアイデアがいる時に、「地域でこんなことができるよ」と話し合えることが、コミュニティ・スクールの大事なところだと思う。そういったコミュニティ・スクールになれるよう体制を整えていく必要があると感じる。

(委員)

地域子育て支援センター「いるかひろば」の現状、そして親の育ちを考えるファシリテーターの立場として発信させていただく。「いるかひろば」は実際に遊びに来てくれる方とオンラインのハイブリッド型で実施している。直接、いるかひろばを利用される方はすごく減ったけれど、オンラインで参加することによって、しんどい人の声が、私たちに届いてくる。これを私たちだけのものではなくて、やはりみんなに届けていきたいし、届けなくてはいけないと常に思っている。

また、親の育ちを考える学習プログラムで思ったことは、保育所や幼稚園から、このテーマでお話してくださいと要請があって、私がお話をさせていただいている。例えば、今回は、「子どものトラブルについていっしょに考えよう」というテーマが1つと、「子どもの食事って、これでいいの？」っていうテーマが1つ、最後に「子育てって…」の3つのテーマでお話させていただいた。最終的にお母さんから出た言葉は「実は私は虐待の家族で育ちました」や「うちの息子、発達障害があって、どういうふうに関わっ

ていいのかわかりません」、「すごく孤立してます」といった声だった。やはり、保育所や幼稚園側が要請したテーマと、お母さん方が話したい現実にギャップがある。保護者からの要請があってテーマを決めることもあると思うが、私たちが要請があったテーマに沿ってお話して終わってしまっている現実がある。やはり、保護者側が今抱えている問題を幼稚園・保育園の先生方に投げかけて、先生方と協議もしていきたい。本質的な問題に向き合う必要があり、ファシリテーターの課題の1つではあると思う。実は、地域学校協働活動の中でこれが大事なことだと思っている。

昨日、地域コーディネーターをしている方から、私の方に電話があった。理由は、地域の小学校、中学校で不登校の子どもがおり、どのような対応をしたらいいか？だった。今年度、この高知県地域学校協働活動推進委員会の委員に推薦していただき、地域学校協働活動の研修会等に参加する中で、何人の方かと顔見知りになれた。その方たちと、各地域で困っている方の話を出し合い、今後どのようにしていこうかなっていうことを話をするのができた。組織として向上していくこともすごく大事であるが、知っている仲間同士で地域の子どもたちをどのように育てていけばいいか話し合ったり、集まったりすることが地域学校協働活動だと思う。本推進委員会に参加させていただくことで、保育所や幼稚園、学校、支援センターでしんどい思いをしている保護者の現場の声を少しでも届けられるきっかけになれば本当にありがたいと思う。

(委員)

お話を聞きながら、私の普段気にしていることややっていることを1つだけお伝えしたい。多分あまり難しいことをコーディネーターにお願いすることは、無理があると思っている。うちの小学校で気を付けているのは、とにかく花壇を花いっぱいにしましょうとか、花で学校をきれいにしましょうとか、そういう簡単なこと。今はニホンスイセンが結構いっぱい咲いており、近づいたら香りも良くて、そういう花の匂いを嗅ぐ習慣を子どもたちに付けるとか、そういったやり方ならコーディネーターがやれるし、やるべきじゃないかなと思ってます。例えば、地域の人から花の苗をもらったり、球根をもらったり、そういうことで地域とのつながりをちょっとずつ深めていき、春夏秋冬、学校を花で埋める。うちの小学校、今話題の牧野富太郎さんが一番愛されたサクラ、センダイヤザクラが5本あり、これが牧野さんが愛したサクラなんだよ、ということを常に子供たちに教えることもできている。コーディネーターに求められているのは、そんなに難しいことではなくて、そんなに難しいことをする必要もないともっている。

また、ちょっと余力があれば、コミュニティカレンダーづくりにも取り組むということで、地域のことを皆が知ることが大切であると思う。

(委員長)

ちなみに、保育所や学校でしんどい思いをしている子どもやその保護者の対応に関しては、誰がどのように対応しているか。

(委員)

私の地域の公民館で毎月、民生委員と社会福祉協議会の委員が情報共有をされており、学校長も来たりしている。私にはもちろんそこで話し合われた情報は入らないが、そういう共有の場が公民館で行われている。高知県版の地域学校協働本部事業にもうたわれていると思うが、民生委員の力量に頼るといい。民

生委員も高齢化して大変なのは重々承知だけれど、私の把握している範囲では民生委員はそこその知識もあるし、活動実績もあるし、非常に良心的な方々が民生委員になっておられるので、地域内で動いてもらうということが一番いいのではないかと思う。

(委員)

子育てが個人のものになっていて、地域の課題として捉えられてないところがすごく大きな問題だと思う。そこをやはり、地域でやっていかなければいけない。地域コーディネーターの役割が「花壇を花でいっぱいにするといった基本的なもの」とするならば、そこは手段のところである。しかし、根底にある孤立している家庭があるとか、いろんな状況の中で地域の課題としてそれを議論していく場がある。学校と地域が共有できる場が、それぞれの市町村でなければいけないと思う。その場があって、初めて課題が共有でき、地域コーディネーターの活動場所や役割が決定し、課題解決のためにみんなが同じベクトル合わせをしていくような組織作りや組織活動ができると思う。それを作っていかないと、学校運営協議会が形骸化、形式的になり大きな課題としてでてくると思う。「地域で起こっていることっていうのは個人の問題じゃないよね。地域の課題よね」っていうふうなところで押さえていく場っていうのが、この学校運営協議会になるかもしれないし、あるいは別の要保護児童対策地域協議会かも知れないし分からないが、共有ができる場がないと地域学校協働活動はできない。

(委員)

地域と学校をつなぐ地域学校協働活動推進員(コーディネーター)の機能の強化を図るためには、コーディネーターに何を望んでいるのか。しかし、そこには地域差とか取組の差があると思う。先ほどから言われているように、何をどうしていいのかが分からないとか、今すごく順調にしているが更によくするためにはどうしたらいいとか、その段階がまだ高知県の取組の中には格差があるだろうと思う。そういった中で、まず大事にしないといけないのは、学校は何と何と何をすればもっと豊かな学校生活や経営ができるのかを明確にすることと、それを達成するために協働を投げかける地域と学校の強い信頼関係があると思う。ただ人を選んで集めて、その中でこれとこれとこれをしてほしいから手伝ってくださいではなくて、地域も真剣に学校と共にやろうっていうその意図や強い絆が必要。それらを生ませるためには、やはり学校の教育活動を常に開いて見せておくこと。そして、PTA活動、地域の教育活動に学校も参加しながら、学校と地域の協働場所を強化していく。一番はもう信頼関係。その信頼関係の中で、学校はこれとこれとこれをしてみたい、じゃあそれは、あの人だったら大丈夫、この人だったらと考えていく。人はリーダー性を持っていると思うので、そのリーダー性を持った人に目を付けるのは、やはり学校だと思う。そこで組織作りの中で何をどうしたいのかを、具体的に皆に聞いている学校運営協議会は学校・地域ともに力を出しやすい。そして、実施したことを評価し、地域へ還元していくことを学校がまた発信することによって、地域の他の人へ反映していくことが1つ大事なことである。学校が一体となり、年間の計画やスケジュール感をしっかり持って地域に根ざし、コーディネーターに対する感謝の気持ち等をPTAや学校が持つ。その中で、本当に素晴らしい力を1つ1つ出してくれるのではないかと思う。

そこで、その学校を育てるのが、生涯学習課のコーディネーター研修の内容である。研修の内容をもう一回見直して、どうしたら学校が一人歩きできるのかという所にポイントを置くことと、市町村の担当者がいかに市町村の学校に広めていけるかという所を4月当初とか早め早めの対策をしていくことで、



学校も乗り気になる。学校が乗り気になったら、各学校の実情に応じたコーディネーターの役割や方法が必要と考える。

(委員長)

今とても大事なことを言ってくくださったように思う。課題の共有をすることの重要性は委員の皆さんも共通認識している部分であるが、そこに集まってくれている人たちが、自分事として関わっていないと、ただの情報共有に終わってしまい、一緒に課題を解決していく力は、そこからは生まれにくい。みんなと一緒に考えて、一緒に動いていこうという組織になっていくためには、単に人を集めればいいだけではなく、どうしていったらいいのか、まずは学校の在り方、もっと開いて日常的に関わってもらえるような環境を作っていくことが重要であることをご指摘いただいたように思う。

(委員)

今のことに関連して、私自身コミュニティ・スクールにずっと関わっており、年に4、5回呼ばれて話に行くが、その中で言わせてもらうのは、「コミュニティ・スクールは何をすところか」。要は、その学校の方針を決める所。なかなか急には難しいかもしれないが、私は学校の教育目標は、ぜひ学校運営協議会で作りたいたいと思っている。要するにそれは、目指す子ども像、その地域でその学校の子どもに、どんな力を付けてもらいたいのかというのを、やっぱり議論できるようにするというのが、学校運営協議会だと思っている。私の学校は今年立ち上がったので、今年はとにかく回していくのに精一杯であるが、来年は学校教育目標と一緒に作りましょうという話をしている。委員の中からは、「そんなことやっていいのか」とか「そんなことできるのか」と言われるが、急には難しいかもしれないけれども、ちょっとずつそんなことをやっていって、要するにみんなで学校教育目標を作るっていうことが、コミュニティ・スクールだと思っているので、それを目指したいと思う。でも、なかなかそういったことがまだまだ理解できていない学校も多くて、「そんなことできるんですか」みたいなことをよく言われる。私は今までの学校でそうやってきたので、是非そんなふうにしていきたいと思っている。

(委員)

地域学校協働活動っていう部分が自分の関わっている業務と直接関わってくることが少ないが、高知市の児童クラブ、公設公営でさせていただいて、第1回の時に申し上げたように、学校との関わりは、かなり密にさせていただいている。支援のいる子どもについてのケース会議というところでも、児童クラブの職員、支援員、学校の先生方、あとサービス事業者の方、保護者の方が集まって話し合う機会ある。そう言えばふと考えてみると、そこに地域の方が入っていることは今までなかったなと思っているところである。例えば、課題として、なかなか学校に時間までに登校できなかつたり、あるいは放課後児童クラブが終わってお家の方になかなか帰りがたがらなくて、児童クラブを出てから帰宅まで2時間ぐらいかかっている子どもがいたり、そういった時に地域の方の声がけや見守り等、ちょっと手助けをいただいたら、こちらの方もすごく安心でき、子どもにとっても地域の方に見守っていただいているという安心感ができるのではないかと思う。そういった小さなことから取組として地域の方と協働させていただくことは、今の私が関わっている業務としては、大事なことであると感じる。

(委員長)

高知市版の地域学校協働本部もあると聞いたが、その所管はされていないか。

(委員)

子ども、放課後児童クラブ・子ども教室所管は、こども未来部という子ども関係の部署になっており、教育委員会とはまた別になっている。

(委員長)

高知市版地域学校協働本部や放課後児童クラブに関して、高知市教育委員会と連携したり話し合ったりすることはあるか。

(委員)

児童クラブの運営について、学校と協働させていただくことは常にしているが、そこに地域の方が入って活動を広めていくような取組にはなかなか至っていない。

(委員)

ちょっと生涯学習課に苦言を言わせていただくことになるかもしれないが、先ほどお話しをしたように、私自身年に何回かお話に行ったりしている。その中で私は、コミュニティ・スクールを推進するポイントとして「地域コーディネーターが大事です」と「これを重視してください」という話を毎回しているが、行った先々で「地域コーディネーターがいません」、あるいは「教頭先生がやっています」というパターンがぼつぼつある。この地域学校協働本部の事業について、国は地域コーディネーターのコーディネート機能が大事だと言っているが、あまり高知県はそれを大事にしていない、あまり重視していないのではないかと感じる。地域学校協働本部を増やすのに、精一杯だったかも知れないが、地域コーディネーターにあまり必要性を言ってなかったのではないかと危惧しており、ちょっと気になっている。それから、この高知県地域学校協働活動推進委員会で前にも言ったことあるが、前の学校に赴任した時に「地域コーディネーターは、隣の中学校の教頭先生です」と言われた。「それじゃ絶対、学校と地域の連携は進まない。だから私が責任持って地域コーディネーターを探します」と言って探したことがある。そんな学校が結構、高知県内多いのではないかと危惧している。ちょっと何とかしてほしいと思う。

(生涯学習課)

県も決してコーディネーターが大事ではないと思っておらず、大事だとすごく思っている。今回のレジュメにも書かせていただいたように「キーパーソン」だと思っている。確かに、市町村担当者に聞くと「人がいない。そんな優れた人がそう簡単に見つかるものではない。そうした人は既に何かされている」というお話があった。それから、教頭先生がやられている。確かにそのような現状もあるが、平成30年からそういうところに目を向けて、やはり学校や地域が思い描いているコーディネーターに近づけるために、年3回各地区でコーディネーター研修会を始めている。ただし、研修会で椅子に座って情報共有したり、講師の話の聞いたりしたら、立派なコーディネーターになれるとは思っていない。やはり、経験値が必要でトライアンドエラーを繰り返すことで、「あっ、こうやったら人ってつながれるんだ」とか、「こうやっ

たらコミュニケーション取れるんだ」、「あっ、合意形成というのは、こういうふうにするとうまくいくんだ」というような経験がないと、合意形成の力もなかなか付かないし、地域を巻き込むこともできない。そういう経験値や失敗を各地域のコーディネーターが意見共有をして、「あ、こういうことやったらいいか」というヒントを得ていけるような研修会にしたいと思っている。ここ何年かは、竹原先生にお越しいただき、竹原先生にも地域コーディネーターの重要性についてお話いただいている。「地域学校協働活動で何するの？」ではなく、「どんな子に育てるの？」という議論があったら、後はもういらぬというよな、極論を言うと、そう言っている。そのベクトル合わせさえすれば、それぞれが当事者で、「自分はこの守備範囲でこういうことやれるね、自分だったらここかな、学校はここだよ、家庭はこうだね」となり、それが今言ったようにコミュニティ・スクールの中で意見共有されれば、あとは委員さんが言うよに組織の問題になるのかなと考える。県としてもまずはどんな子どもを育てるのか、そのベクトル合わせはきちんとする。何をするかは、本当に地域によってそれぞれだと思う。例えば、木が豊かな地域であれば、森林関係の環境教育をやって子どもたちの体験活動を増やそう。近くに田んぼがあれば、5年生で田植えの農業学習があるからそれをやってみよう。いろんな選択肢があると思う。選択肢はいろいろあっても、やはり「何のために今これをやっているの？」という点が共有されていないと、全部地域の人たちが手取り足取りやっしまい、子どもたちはお客さんとなり、結局今回のテーマである「自律」が育ってないよぬという結果になってしまう。やはり子どもたちに「自律」を育てるために、ここは黙って我々大人は一步引いて子供たちに任せてみよう。そのようなことが事前に共有されていれば、うまくいくのかなと考える。県もこれからコーディネーター研修会の中身について、委員の方からご指摘いただいたよに、いろいろ検討していきたいと思う。

(委員)

今お話を聞きながら、学校運営協議会を立ち上げるに当たって、いま高知市も担当指導主事を中心にいろいろ情報発信しながら随分と先生方、管理職の意識も高まってきている。ただ、運営協議会を立ち上げるのに、既存の組織を活用することは確かに大事だが、例えば、名称が「開かれた運営協議会」になったとして、表看板だけ替えたとしても、運営協議会の強みを生かした実践にはならないと思う。そのところで今、運営協議会設置の風を吹かすと同時に実際運営協議会を立ち上げた時に、どう運用していくのか、何を協議をして、その協議した内容をどう実践につなげていくのかという、実際の運用についての理解を今後深めていくことよって、設置の部分と運営協議会の質の向上、この両方を図っていく時代が来ているのかと思っている。来年そのような研修もぜひ組んでいただきたいと思う。

(委員長)

最後に、本日の協議を総括する。協議の結果、コーディネート機能の強化を図るためのアイデアは2点に、コーディネーターを支える周囲の役割は2点にまとめられると考えた。

#### 【コーディネート機能の強化を図るためのアイデアとして】

1つ目は、コーディネーターの役割とか業務というのは非常に重層的だったり、段階的なものであったりするということ。委員さんのお言葉を借りれば、とにかく花壇を花いっぱいにしたり、花で学校をきれいにしたりする簡単なものから、困難を抱えた子どもや保護者の声を聞くといった難しいことまで、幅広

いものがあるということ。まず、そうしたコーディネーターの仕事や役割を何でも十把一絡げに理解するのではなく、重層的、段階的なものなのだという理解が大事だということ。

2つ目は、それを踏まえて、やはり難しい業務や仕事に関しては、専門家だったり、あるいはベテランの力を頼むということ。具体的には、民生委員・児童委員の方々の力をもっと頼ってもいいのではないか。あるいはコーディネーターをサポートするアドバイザー、第三者の存在。これはいわゆる統括的なコーディネーターというのが、それに当たるのではないかと思う。中教審の答申には、現場のコーディネーター以外にも市町村に1人くらい統括的なコーディネーターを置くべきだというようなことが提起されていたりもする。そういう統括的なコーディネーターこそが求められていると思われた。

#### 【コーディネーターを支える周囲の役割として】

1つ目は、やはり学校の存在。学校の理解、学校の中でのコーディネーターの位置づけをはっきりとさせること。学校の協力が不可欠であること。

2つ目は、コミュニティ・スクールの役割。しんどい思いをしている保護者が声を上げた時に、受け止め先がない。やはり、それを受け止めるのがコミュニティ・スクールの役割である。そして、いろんな子どもの課題、学校の課題を「地域の課題」として共有していく。それを自分事として一緒に考えて解決に向けて行動していけるよう組織として、コミュニティ・スクールの在り方が提起されたのではないかなと思う。

以上をもって議事全部を終了、11時30分に閉会。